福島県現代俳句協会会報

第１２号　２０２２年・秋
編集　福島県現代俳句協会会報編集部　春日　石疼

現代俳句協会発行「始める！俳句」の活用で俳句愛好者を増やそう

現代俳句協会・事業企画部発行の「始める！俳句～俳句入門」という冊子が県現俳に届きました。このテキストは「各地区協会が初心者講座を開く一助となればとの思い」で作られたもので、全五ニページの「俳句を一から始める人びとへの道案内」です。

冊子として届きましたが、その他に「同内容の横書ＰＤＦ版」「テキスト内容を自由に組み合わせたり、独自資料を追加できるＰＤＦ版」があります。冊子版は現時点では無料配布されるそうですし、ＰＤＦ版は協会よりデータ受領可能となっています。想定される初心者講座のモデルも提示していて、このテキストで月一回（三十分の講義と二時間の句会を想定）、年十回の開催。想定収支表なども例示してくれています。

テキストの内容は初心者向けで大変わかりやすいのですが、俳句経験者でも発見の多い内容だと思います。

まず気づくことは「俳句自由」の精神が一貫して流れていることです。型どおり「季語」「定型」と話は進みますが、例えば「季重なり」についても「季語が二つ以上あると、感動が分散して散漫になりかねないと考えられた時期もありました」と過去形の表示。「無季俳句」に対しては「季がないというよりは季以外の物がテーマとなっています」と、あっさりと鷹揚な対応になっています。

目を開かせてくれる言葉もいくつかありました。「切れは、一行に書かれた俳句の切れ目で、複雑な内容を読み解く手がかりを与えるものです。俳句を読むときは、まず意味の切れ目を探すようにしましょう」「二人（虚子と碧梧桐）は、俳句の文化としての側面と、文学としての側面をそれぞれ発展させた」などは至言でしょう。

また唸らされたのは「月並俳句」に対する言及です。「概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず」と子規が指摘したが「現代では全ての句がそうだったとは考えられていません」と書き、以下のような句をあげています。「水鳥と同じうねりの丸太かな　成田蒼虬」「沖見ゆる障子の穴もしぐれけり　桜井梅室」「殻になる無常もありて蝸牛　田川鳳朗」確かに読ませます。（でもやっぱり、ちょっと「月並」と思ってしまいますが・・）

さらに、ところどころに挿入されている「コラム」が面白い。「俳句はいつの時代も面白い。しかし、俳句はいつも行き詰っている。行き詰った中で打開策が唱えられ、新しい出口が見つかる。それが俳句の歴史である。」いい言葉ですね。噛み締めたい言葉です。

この「始める！俳句」を活用して、本来なら福島県現俳総力で俳句入門講座を取り組みたいところですが、今のところ目途が立ちません。福島県現俳に結集している一人ひとりの皆さんは、力量のある人ばかり。それぞれが身の回りの人たちに声をかけてチャレンジしてみませんか。県現俳としても可能な限りお手伝いいたします。

（春日　石疼）

～おしらせ～

秋に予定の吟行句会はコロナ拡大のため実施しません

会員作品7句

夏の果

海野　良夫(河沼郡)

河童忌のゆくりなく臭ふ朝の水
河童忌の爪剪り揃え虚しかり
河童忌の打ち水あの世この世へと
餓鬼忌とやラッパ飲みして酔ふビール
プール後の爆睡の吾子の卍なり
終戦日ゾンビを真似て子は飽かず
亡き父のステテコ捨てて夏の果

はつ夏のこども

髙市　宏(郡山・桔槿／小熊座)

青き踏む満一才の足のうら
母と子の散歩くねくね猫柳
こどもが嘘ついて咲きたる柿の花
はつ夏のこどもが土管駆け抜ける
よだれ掛けして頬ばれるさくらんぼ
ママの手より魔法のやうなしゃぼん玉
父の日の父の足裏踏む子ども

鎮魂

柴田　郁子（いわき市・岳）

気嵐の立ちて鎮魂勿来沖
雪紐にはぐれ雀がただ一羽
桃花水大山祇神も笑まひをり
海光る勿来関の初桜
滝桜千年の蕊降らしけり
六月や戦下万物欷歔満つる
狼の眼みつめる夢幻荒野

余寒空

春日　石疼（福島・小熊座）

ある日静かに爆煙あがる蒸鰈
春北風の一撃狐目の男
鶴引きにけり荒涼の戦地へと
武器！武器！と叫び雪間に斃れたり
土壙掘り埋める兵士百千鳥
瓦礫また殖やす地球よ余寒空
青き空黄の麦秋の国のこと

真砂女の忌

久保　羯鼓(福島・小熊座／藍生)

世を遠く生きたる思ひ土筆摘む
春暁の靴音高く生きてゐる
生者死者落花の中を通り過ぐ
熱帯夜抱擁解かぬ道祖神
黒沼へ梅雨を引きずるごと暗し
万緑のほてり鎮むる豪雨かな
海のもの天麩羅にする真砂女の忌

ぐるぐる

阿部　ゑみ子(福島・小熊座)

蝶の香と思う茅の輪をくぐるとき
蝶の道たどりて茅の輪抜けられず
心臓の形の曲輪揚雲雀
かっこうや岩座（くら）には小さき洞一つ
信じたき方へぐるぐる金魚たち
指先を昼の蛍の一巡り
安達太良山は定点我の春蝉の

私の好きな季語

「春の鳥」

佐川　盟子

春は鳥の声に一日が始まる。かつて牧場だった土地に建つわが家は、古い分譲地の西の外れにあり、隣はもう雑木林だ。南に広がる田畑の向こうには低い山が連なり、猪や猿が出没するという。冬のはじめに北西の風が雑木林から枯葉をどっさり運んできて雨樋をつまらせ、あたたかくなれば草刈り草むしりのヘビーローテーション。そんな場所だからなにしろ虫がいっぱいいるし、一年じゅう、鳥たちで賑やかだ。

休日、庭に面した窓際の机で過ごしていると、鵯が椿を啄んだり、水浴びをして羽を震わせたりするのを見ることができる。雀はチームで来てはいっせいに逃げるけれど、ひとりぼっちの尉鶲は私を怖がらない。鶺鴒は飛ぶような速さで歩き、鷺は田んぼで思索に耽る。電話の相手にも聞かれそうな声は雉だ。

窓を開けると砂埃が舞い込み、気がつけば机の上がざらざらしていたりする。そういえば、前に住んでいた、都庁を遠望する十階の部屋は、壁に穿たれた換気口から排ガスの粉塵が入り込むから、ぴっちり閉めておかなければならなかった。その家での十七年の暮らしを閉じ、田舎の古い家に棲みつくことになった。

今年は鶯が遅いね、いま杜鵑が鳴いた…、ここに来なければ、しなかった会話。日々のことに行きづまるたび、樹木に励まされ、鳥たちに慰められている。

私を変えた一句

泥かぶるたびに角組み光る蘆

高野　ムツオ

東日本大地震から十年が過ぎ、被災地の復興も道半ばの中で残念ながら風化が進んできている。この間私も俳句を始めて様々な句に出会いましたが、その中でも私を変えた一句がこの句でした。

泥かぶるたびに角組み光る蘆

津波が押し寄せた自宅そばの砂押川の河原で泥の中でも蘆の穂先が光に輝いている。この蘆の生命力に多くの災禍を乗り越えた東北の先人や震災の苦難に立ち向かう被災地の姿を重ねたこの句のスケールの大きさにとても惹かれました。

俳句は時事には向かないと言われていますが、突然突きつけられた現実を見つめる中において、この句の持つ力に改めて詠み続けていくことの大切さを感じました。

藤巻　淳（福島）

（続き）

わが墓を止り木とせよ春の鳥　中村苑子

苑子の句をしみじみと思う。

雪明り母の歩幅に合せ行く

鵜川　伸二

娘の読み終えた「公募ガイド」を何となく眺め、何となく応募した作品集の吾が句を眼にした時、余りのショックに赤面すら覚えた。

そんなことから新たに福島テレビ「くらしの文芸」に応募して、この句がたまたま特選となり、良し悪しはともかく初めてのことで尚更嬉しかった。

と云うのは、今は亡き母とは色んなことがあり、日に日に弱る背中を目の当たりにしていた思い入れの一句だった。

未だに進歩の無い私だが、当時俳句とは訳の分からぬ中で、自分なりに弾みがついたのを思い出されます。

私は四人の子を抱える父子家庭だったので、こんな句を作っています。

冷えた汗より真つ先に子らの顔
夕やけて買ふ買はないは娘に委託
娘にもらふ手首に気づく父の日
末っ子に何ら罪無き独り酒
父子舟すきま風らしことを経て

限りある時間を引き続き楽しめればと思っています。

鵜川　伸二（郡山）

県会員作品一句鑑賞

瞑想と睡りのあはひ蟇

鈴木　満喜子

県会報「第一回通信句会」より。一読して、まず印をつけたのがこの句。蟇が薄目をしてそこにいるように思えて、そうそうと頷いた私。「瞑想と睡りのあはひ」まさに蟇ならではの姿。眠っているのか、何か考えているのか分からない、でもそういうことが実は人間にとってもとても大事な時間なのかも。私なんてはいつもアセッていて蟇になれないでいる。蟇になって薄目を開ければ何か見えるかもしれない。

（唯木　イツ子・福島）

君はもう素粒子粉雪また粉雪

佐藤　弘子

「君」が素粒子になるまで分解されてしまった驚き。その最小単位で、まだ漂っているやもと幽かな希望。そして「粉雪また粉雪」と重ね、消滅を受容する静かな諦念。

「素粒子」というきっぱりと清潔な言葉が喪失の深さを純化する。「君」は作者にも読み手にも繋がり、無常が沁みる。

弘子氏は、俳句初心の私を丁寧に導いて下さった稀有な恩師です。

（佐藤　保子・福島）

前号会報より

この句がよかった

国分衣麻

除染袋の番号巨き流れ星　　植木　國夫

２０１５年５月、福島第一原子力発電所が遠望できる滝川ダムの橋の上に、私は独り立っていた。富岡町に入ると防護服を渡された。須賀川から富岡町の海辺に至るまで、番号が記された除染袋をどれ程見たことであろう。流れ星の一瞬に、理不尽なる現実の未来への希望を祈った作者。俳句の勘所を心得ていて汚染された地球と流星の取り合わせが絶妙。

点滴に花の吐息も混ざってる　　清水　茉紀

点滴は、まさに命をつなぐ雫である。その点滴に、花の吐息が混じると捉えた女性らしい感性の豊かさ。詩的抒情あふるる美しい珠玉の一句。ポエジー豊かな他作品、「冬の香水足裏立たす屍室」「赤い月新書のような君が逝く」などの季語の斡旋が新鮮。

おめおめと生き永らえて利休の忌　　池田　義弘

安土桃山時代の茶人、千利休の忌は一五九一年四月二一日。信長、秀吉に寵遇されながらも、秀吉の怒りにて潔く自刃した。その利休に想いを馳せれば、いま在る自分は「おめおめと生き永らえている」と敬虔なる祈りを利休に捧げる作者がうかがえる。ある意味、利休との相聞の句である。

他に、素直に共鳴共感できる句「駄句駄句と丸投げにして月夜のポスト」などは、私も同じなのでホッとさせて頂いた。「月夜のポスト」の措辞やきびきびとしたリズムが巧み。

おといもきのうもきょうも雪を掻く　　浅田　正文

金沢在住の作者。金沢の積雪量は、一月だけでも、二メートルに及ぶと云う。

その雪を「おといもきのうもきょうも」とあえてひらがな表記にした作者の意図。読み手には、切々と降る雪模様が、その意図で伝わってくる。十七文字に雪の厳しさを託した。雪国ならではの他作品に「雪解けて無垢から戻る汚れかな」は、雪の美と醜を一句に据えて圧巻。

≪編集後記≫

6月からすでに、猛暑日、スコールのような土砂降りと、熱帯気候の日々が続いています。

「梅雨寒」という季語が恋しく思えました。

激しい季節、どうぞ、ご自愛ください。というと、池田澄子氏の「無花果や自愛せよとは何せよと」が頭から離れなくなりました。（E）